

『落窪物語』における短連歌

鹿野谷有希

一 はじめに

『落窪物語』には、短連歌が二聯収められている。短連歌とは、前句（上句）と付句（下句）の二句一聯の唱和だけで詠み終わる連歌のことである。平安時代中期頃から次第に盛んになり、その頃の文学にいくつか用例が見られるが、平安文学における短連歌についての研究はあまり多くなく、殊に物語における短連歌の研究は、ほとんど行われていない。本稿では『落窪物語』において、短連歌がどのように使用され、どのような効果をもたらしているかを考察していきたい。

なお、本稿においては、『落窪物語』の
はかなくて消えなましかば思ふとも

言はでをこひに身をこがれまし
(巻二、一六七頁)

という短連歌を主に考察していく。もうひとつの短連歌である

何ごとを思へるさまの袖ならむ

身を知る雨の雫なるべし
(巻一、六九頁)

については、別稿を用意したい。

二 短連歌について

『落窪物語』の短連歌について検討する前に、まずは短連歌についてももう少し詳しく見ておこう。短連歌は、和歌の上句五七五と下句七七とで唱和問答する、二句完結の連歌である。ただし『源順集』や『袋草子』には、上句五七と下句五七七に分けられるものも存在する。短連歌の起源は、『万葉集』巻八（一六三五）の尼と家持の唱和とも、『日本書紀』の日本武尊と乗燭者の問答（酒折宮問答）とも言われている。

それでは短連歌には、どのような特質があるのだろうか。『大和物語』第一二八段には

わたつみのなかにぞ立てるさを鹿は
(すき者ども)

秋の山べやそこに見ゆらむ
(檜垣の御)

という短連歌が収められているが、このような問答型の短連歌に見られる特質に、まずは注目したい。この問答型について土橋寛氏は、「かやうに連歌も歌才試問の文學である事は、短歌を以てする贈答と同様であるが、答の形が短だけ相手が束縛を受けることは大き

いのであるから、より有効な試問方法だと言へる。⁽¹⁾と述べている。先の『大和物語』第一二八段は、風流な人たちが意地悪をして、わざと常識を外れた前句を詠んだのに対して、檜垣の御が機知に富んだ付句を詠み、うまく切り抜ける、という内容である。この章段は檜垣の御の機知を示すためのものであり、少ない文字数で返歌しなくてはならない短連歌であるからこそ、檜垣の御の機知が際立っているように思われる。これは、短連歌が持つ特質だといえる。

また木藤才蔵氏は、『大和物語』第一六八段等に見られる

人ごころうしみつ今は頼まじよ

(女)

夢に見ゆやとねぞ過ぎにける

(遍昭)

を、「洒落と洒落とが対応し、それがともに時刻をひつけて呼応するように句作されているところに、完成期の短連歌に匹敵する高度の技法をみることができる。」とし、また『伊勢物語』第六九段に見られる

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば

(斎宮)

またあふ坂の関はこえなむ

(男)

を、「上句が、まことに心残りなことだという意味を言外に匂わせているのに対して、下句のほうでは積極的に再会の気持を述べているものの、上句の深い思いを智的に軽くさばいたといった趣のものである。」⁽²⁾として、平安朝に入ってから宮廷や貴族社会において行われていた連歌は、遊戯的色彩が濃いと述べている。⁽⁴⁾

これらをまとめると、これまでの研究では、主に付句を詠む者の機知を試す、言語遊戯的な側面が、短連歌の特質であるとされてき

たことが分かる。はたして『落窪物語』の短連歌にも、同様の特質を見出すことができるのだろうか。

次に、『落窪物語』が成立したとされる一条朝頃までを対象として、平安時代の文学に短連歌がどの程度見られるのか確認しておこう。

まず和歌集であるが、勅撰和歌集(三代集)においては『古今集』では一聯も見当たらなかったものの、『後撰集』では一聯、『拾遺集』では六聯が見られる。私家集は『業平集』『遍照集』『檜垣集』『赤染衛門集』などで見られるが、特に『実方集』には二〇数聯もの短連歌が収められている。

次に日記・随筆では、『蜻蛉日記』『枕草子』で二聯、『和泉式部日記』で三聯見られる。

最後に物語だが、『伊勢物語』(六九段)に一聯、『大和物語』(一二八段、一六八段)、『平中物語』(九段、二五段)にそれぞれ二聯ずつ見られる。一方で『竹取物語』『宇津保物語』『源氏物語』には、まったく使用されていない。このことから、短連歌は短編の歌物語のみに用いられており、中・長編物語には使用されていないことが分かる。さらに短編の歌物語においても、一つの章段に一つの短連歌しか使われていない。中・長編物語でありながら二聯もの短連歌を取入れている『落窪物語』は、異例の作品だといえる。ただし、散逸作品に短連歌が使われていた可能性は当然あり、あくまでも現存する作品から述べているということを付け加えておきたい。また、三聯の短連歌を含む『和泉式部日記』は、『和泉式部物語』とも称

される。実在した人物（和泉式部・敦道親王）によって和歌が詠まれている点で、完全な作り物語である『落窪物語』とは区別されるが、両者には意外に近い一面もあるのかもしれない。

三 『落窪物語』の短連歌

次に、『落窪物語』の短連歌について見ていこう。『落窪物語』に収められている短連歌は、次の二聯である。

①前句・道頼 何ごとを思へるさまの袖ならむ

付句・姫君 身を知る雨の雫なるべし (巻一、六九頁)

②前句・姫君 はかなくて消えなましかば思ふとも

付句・道頼 言はでをこひに身をこがれまし

(巻二、一六七頁)

今後これらの短連歌を示す場合、例えば「何ごとを……」の短連歌を示す場合は、①、もしくは①の短連歌と称することにした。

ここで、①と②の短連歌が詠まれた背景について、簡単に説明しておこう。まず①が詠まれたのは、姫君と道頼の結婚三日目の夜である。激しい雨のため、道頼は姫君のもとへ向かうことを諦め、そのことを伝える手紙を姫君に送った。中納言邸では、その手紙を読んだ姫君と童女のあこきが落胆している。一方、あこきの手紙から今夜が三日目の夜だということを再認識した道頼は、中納言邸へ向かうことを決心する。①の短連歌は、激しい雨や盗人に間違えられるなどの、様々な困難を乗り越えて姫君のもとに到着した道頼が、姫君と対面し、詠み合った歌である。

そして②が詠まれたのは、姫君が道頼により中納言邸から救出された後の、ある雪が降る冬の日である。姫君と道頼は火桶を囲みながら、この短連歌を詠み交わしている。冒頭でも述べたとおり、本稿では②の短連歌を主として考察していく。

この二つの短連歌には、共通点と対照的な点がいくつか存在する。以下に箇条書きで示してみたい。

【共通点】

- ・詠み人は姫君と道頼である。
- ・手紙によるやりとりではなく、隔てもなく対面している場で詠まれている。
- ・短連歌のあとに「臥し給ひぬ」という記述がある。

【対照的な点】

- ・詠む順番が逆である（①は道頼から姫君であるが、②は姫君から道頼である）。
- ・和歌が詠まれた場面の、物語における必要性が異なる。
- ・対照的な点の二つ目にある「和歌が詠まれた場面の、物語における必要性」について説明しておこう。①は、結婚三日目の夜、大雨の中を道頼が姫君のもとへ向かうという、『落窪物語』の中ではもっとも有名かつ重要な場面の一つで詠まれている。物語の流れの上で無くてはならない場面であるが、他方、②が詠まれた場面は挿入話的であり、たとえこの場面が無くなったとしても、物語の流れに支障はないように見える、ということである。

四 短連歌「はかなくて……」

この節では、②の短連歌について考察していきたい。まずは②が詠まれている場面の本文を、次に掲げる。

(道頼が)二条におはしたれば、(姫君ハ)雪の降るを見出だして、火桶に押しかかりて、灰まさぐりて居給へる、いとをかしなければ、向かひ給へるに、

はかなくて消えなましかば思ふとも

と書くを、あはれに見給ふ。まことにと思して、男君、

言はでをこひに身をこがれまし

とて、やがて、男君、

埋み火の生きてうれしと思ふにはわが懐に抱きてぞ寝る

とて、掻き抱きて臥し給ひぬ。女君、「いとさしことなり」と

て笑ひ給ふ。

(卷二、一六七頁)

考察に入る前に、②の短連歌で使われている語句や技法等について触れておく。まず、姫君の前句「はかなくて……」に使われている「消ゆ(消え)」という言葉に注目したい。姫君が「消ゆ」を用いて詠んだ歌は、他に四例あるが、その中から二例を見ておこう。

我につゆあはれをかけば立ち返りともを消えよ憂き離れなむ

(卷一、二二頁)

人知れず思ふ心も言はでさは露とはかなく消えぬべきかな

(卷一、一二八頁)

「我につゆ……」は、すでに亡くなっている実母を思いながら詠

んだ和歌である。姫君は中納言邸に在るあいだ、実母がいよいよ悲しみや継母からの虐めにより、何度も消えること、つまり死ぬことを願っていた。「人知れず……」は、継母によって物置のような部屋に閉じ込められているときに詠んだ、道頼への返歌である。硯や筆がないため、針の先で書き付けられている。②の短連歌とは、多くの語句が重なっている上に、筆以外のものを使って書かれた点も共通している。詳しくは、第五節で述べたい。なお、姫君は物置のような部屋に幽閉されているときに四首の和歌を詠んでいるが、そのうちの三首に「消ゆ」が用いられている。そのときの思いを、姫君はいま眼前にある火桶から、想起したものと考えられる。なぜなら、「消ゆ」と火桶の「火」は縁語だからである。

次に、道頼が詠んだ付句「言はでをこひに……」だが、これは前句の「思ふとも」が姫君を主語としているのに、付句では道頼自身を主語に変えて、「(思ふとも)言はでをこひに……」と続けたものである。「恋(こひ)の「ひ」に「火」を、「こがれ」に「焼けこげる」の意味と「恋いこがれる」の意味を掛ける。「火」「こがる」は縁語である。

それでは考察に入るが、まずはこの短連歌が意図されたものなのかどうかについて考えてみる必要がある。なぜなら、当該歌は短連歌の形になっているが、姫君が初めから短連歌にすることを意図していたのかどうかは分からないからだ。①の場合は、道頼が「何ごとを思へるさまの袖ならむ」と、姫君に問いかけているので、短連歌を意図していたということが分かる。しかし②の場合は、問いか

けの形になっていないため、分らない。

姫君が「はかなくて消えなましかば思ふとも」と詠んだ意図として、次の三つが考えられる。

A 独詠歌を詠もうとした。

B 道頼に、短歌（五七五七七）を詠みかけようとした。

C 道頼に、短連歌を詠みかけようとした。

まずAは、姫君が独詠歌を詠んでいる途中で、道頼が下句を詠んだ場合であるが、目の前に道頼がいるのに独詠歌を詠もうとしたとは、考えにくいかもしれない。

Bは、姫君が短歌（五七五七七）を詠みかけようとした途中で、Aと同様に道頼が下句を詠んだ場合である。短歌で詠みかけることは一般的な贈答歌の形であるため、Bを意図した可能性は高い。

またCは、姫君が初めから短連歌にするつもりで詠みかけた場合である。問いかけの形にはなっていないが、前句が問いかけの形になっていない短連歌は、他の文学作品にも多数見られる。例えば『和泉式部日記』には、一月の「みぞれだちたる雨の、のどやかに降る」夜に、宮と女が会話をする場面がある。そこで宮は、出家を仄めかし、女と次のような短連歌のやりとりをする。

なほざりのあらましごと夜もすがら

落つる涙は雨とこそ降れ

(宮)
(女)

このように宮が詠んだ前句は、問いかけの形になっていない。よつて、姫君が短連歌を詠みかけようとした可能性は、大いにあるのである。

はつきりいって、AからCのどれが正しいかを断定することはできない。Aの可能性はやや低いと考えられるので、残りはBとCであるが、ここからひとつに絞ることは難しい。だがどちらにも、姫君から詠みかけたということ共通している。

そこで、次は②の短連歌を、姫君からの詠みかけとみなして考察してみたい。そもそも贈答歌を交わす場合に、女性から積極的に歌を詠みかけることは、一般的ではなかった。『落窪物語』の姫君と道頼の贈答歌を見てみると、姫君からの詠みかけと見られるものがいくつあることが分かる。しかしこれらはいずれも、道頼からの手紙や話しかけに対する、受動的な詠みかけである。受動的な詠みかけという意味を、具体例でもって説明しよう。卷一（一〇六頁）には、

少将の御もとより、御文あり。

「いかにぞ、昨夜の縫ひさし物は。腹、まだ立ち出でずや。いと聞かまほしくこそ。さて、笛忘れて来にけり。取りて賜へ。ただ今、内裏の御遊びに参るなり」

とあり。げに、いと香ばしき笛あり。包みて遣る。

「腹は、けしからず。人もこそ聞け。かう、な思し出でぞ。いとよう笑みてなむあめる。笛奉る。これをさへ忘れ給ひければ、

(姫君) これもなほあだにぞ見ゆる笛竹の手馴るる節を忘ると思へば」

とあれば、少将、いとほしと思ひて、

(道頼) あだなりと思ひけるかな笛竹の千代もね絶えむふし
はあらじを

となむありける。

という本文がある。傍線部の和歌だけを見れば、姫君からの積極的な詠みかけのように見えるが、波線部から分かるように、実は道頼からの手紙に添えての和歌であり、姫君が自分から積極的に和歌を詠みかけたとはいえない。先ほど、『落窪物語』には姫君からの詠みかけと見られるものがいくつかあると述べたが、他の例もこれと同様であり、姫君からの能動的な詠みかけは、②の「はかなくて……」が唯一のものである。

これはおそらく、姫君の安堵感を表しているのではないだろうか。道頼に救出される直前まで、姫君は継母により物置のような部屋に閉じ込められ、好色な老人である典葉助と結婚させられるかもしれない恐怖を味わっていたのである。「消えなましかば」という反実仮想は、「もしもあのまま死んでいたら」ということと同時に、「しかし、実際は生きています」ということをも表している。姫君の詠んだ前句には、最悪の状況から脱出し、今は道頼と一緒に穏な日常を生きているのだという、姫君の安堵感が凝縮されているように思われる。心底の安堵と、道頼と一緒に暮らしていることの嬉しさが、自らの積極的な詠みかけへと作用したのではないだろうか。

その前句であるが、姫君は火桶の灰に、火箸を用いて書き付けている。このように、筆以外のものを用いて紙以外のものに歌を書き

付けることは、他の平安文学においてもいくつも見られる。例えば『伊勢物語』六九段では、女が別れの盃の皿に上句を書いてよこし、男が続松の炭で下句を書き付けている。また先に述べたとおり、『落窪物語』にも姫君が針でもって歌を書き付ける場面(巻一、二二八頁)がある。

当該場面において、火桶は重要な小道具である。先に述べたように、「消ゆ(消え)」という言葉を導いているが、他にも役割があるように思われる。いったい、どのような役割を担っているのだろうか。

一つめは、中納言邸との対比のためではないか。巻一の「(中納言ガ)落窪をさし覗きたりつれば、(姫君ハ)いと頼み少なげなる白き給一つをこそ着て居たりつれ」(二五頁)という中納言から継母への言葉や、「おの(継母)が着たる綾の張綿の萎えたるを(姫君ニ)着せさせ給へば、(姫君ハ)風はただ早になるままに、いかにせましと思ふに、少しうれしと思ふ」(二六頁)という記述から、姫君は中納言邸において、冬になると寒い思いをしていたであろうことが推測できる。このような中納言邸の「寒さ」と二条殿の「暖かさ」を対比させるための道具として、火桶が用いられたのではないだろうか。

二つめは、火の「暖かさ」と雪の「冷たさ」を、対照するためである。姫君が前句で用いた「消ゆ(消え)」は、火桶の「火」の縁語であるとともに、「雪」の縁語でもある。当該場面をただの冬の日ではなく雪の降る日に設定しているのは、「消ゆ」を中心に、雪

の「冷たさ」と対照することで、火桶の火の「暖かさ」を際立たせるためとも考えられる。

三つめは、「生きて」を導き出すためだと考えられる。当該場面の道頼の短歌「埋み火の生きてうれしと思ふにはわが懐に抱きてぞ寝る」の「生きて」は、埋み火（灰にうずめてある炭火）が消えないでいるということだが、これは姫君が生きているということも表している。つまり、姫君の前句の「消え」と道頼の短歌の「生きて」は、火が消える・消えないという対照を表しているのと同時に、姫君の命がある・ないという対照をも表しているのである。

これらのことから、火桶は様々な対照の役割を担っていることがわかる。比較対照することで、現在の姫君の状況、つまり、二条殿の暖かさや姫君が生きているということを、際立たせているのではないか。

最後に道頼の付句を、諸本の比較によって考察したい。九条家本など、ほとんどの諸本は付句を「言はでをこひに身をこがれまし」としているが、江戸時代の板本や古活字本では「いはでおきびに身はこがれまし」としているものがあり、例えば『日本古典文学大系』は寛政六年刊記大活字本を底本とし、本文を「いはでおきびに身はこがれまし」としている。「言はでをこひに身をこがれまし」が多数派ではあるが、②の短連歌を考察する上で、少数派である「おきび（熾火）」を無視することはできない。では、どちらがより適当だろうか。

まずは技法の確認だが、この二つの言葉はともに掛詞が用いられ

ており、「こひ」の場合は「こひ（恋）」の「ひ」に「火」の意味を、「おきび」の場合は「いはでおき」に「おきび」を掛けている。「こひ」であれば「恋の火に身を焦がす」というように、恋愛の意味をはっきりと表すことができるが、「おきび」の場合、言葉を補わなければ恋愛の意味を表すことができない。実際に『日本古典文学大系』の訳を見ても、「あなた（姫）がほかない状態で死んでしまったら、たとえわたし（男）があなたを思っても、口からその思いは言い出せないで、おき火にこげるように、身はあなたを恋うる「おもひ」にこげたことでしょう」というように、「おもひ」を補っている。本文中の当該場面に「おもひ」という言葉は見当たらないため、「おもひ」を補うことは少し苦しい感じがする。

しかし一方で、「おきび」とは火勢の盛んな炭火のことであるから、道頼の激しい恋情を表すのに適しているともいえる。先ほど「おきび」の場合は、言葉を補わなければ恋愛の意味をはっきりと表すことができないと述べたが、言葉を補わなくても、恋愛の意味が含まれていることは想像がつく。また、道頼は付句の直後に詠んだ和歌で、姫君を表す言葉として「埋み火」を使用しており、付句を「おきび」と考えたほうが、

道頼Ⅱ おきびⅡ 火勢が強い炭火
姫君Ⅱ 埋み火Ⅱ 火勢が弱い炭火

というように、対照的になるのである。

結局、「こひ（恋）」と「おきび（熾火）」のどちらが適当であるかを断定することはできないが、どちらも身が火に焼け焦がれるよ

うに恋焦がれているという大意は同じである。

五 おわりに——物語における短連歌の役割

これまで何度も述べてきたとおり、『落窪物語』には二聯の短連歌が収められている。これらの短連歌の役割について考察するため、姫君が道頼によつて救出されるまでの、この二人の状況を、具体的な出来事とともに以下のように区分してみたい。なお、短連歌が詠まれた場面には、波線をつけた。

I 結婚前

・道頼、姫君のことを知り何度も求婚するが、姫君はその求婚を無視する。

II 結婚

・道頼、初めて姫君の部屋に忍び込む（結婚初日）。
・道頼、二日続けて姫君のもとを訪れる（結婚二日目）。

・道頼、激しい雨の中、姫君のもとを訪れる（結婚三日目の夜）。

・継母、落窪の間を覗き、姫君と会っている道頼の姿を垣間見る。

・継母、姫君を物置のような部屋に閉じ込め、典葉と逢わせようとする。

（以上、巻一。以下、巻二。）

・少将と帯刀、姫君を連れ出す相談をする。

・典葉助、姫君のいる部屋へ入ることに失敗する。

III 姫君救出

・中納言家の人々が祭り見物に出かけている間に、

道頼、姫君を救出する。

・姫君たち、二条殿に着く。↑姫君と道頼の対面場面

・道頼、あこきに侍女を集めさせる。

・道頼、普段使用している調度品などを、文とともに二条殿へ送る。↑文による和歌のやりとり

・道頼、継母への復讐を誓う。↑姫君と道頼の対面場面

・道頼と四の君（姫君の異母姉）の縁談が進むが、道頼、身代わりに面白の駒を立てる。

・姫君と道頼、ある雪が降る冬の日短連歌を詠む。
通常の結婚、及び結婚生活の場合であれば、結婚前と結婚後の二つに区分することが妥当であろう。しかし、姫君と道頼の結婚生活の場合、姫君が中納言邸にいたとき二条殿に移った後とでは、まったく異なった様式になっており、これらを結婚後として一括りに考えることは、適当ではない。そのため、このように三つに区分した。

さて次に、それぞれの区分における、姫君と道頼の心身の距離を見てみよう。なお、ここでの「心身の距離」という言葉についてであるが、

心の距離……互いを想い合っているかどうか

身（体）の距離……一緒に暮らしているかどうか

というように定義したい。

I 結婚前↓心身共に離れている。

II 結婚↓心は近づいているが、身体は離れている。

III 姫君救出↓心身ともに近づいている。

I は、物語冒頭から道頼が初めて姫君の部屋に忍び込む(結婚初日)までのことである。その間、姫君は再三にわたる道頼からの求婚を、返事すらせずに無視し続けている。この段階では、姫君は道頼を想っていないし、道頼も姫君のことを本当に想っているわけではなかった。また、当然ながら二人は一緒に暮らしていない。よって、心身ともに離れている状態である。

II は、結婚初日から、姫君が継母によって物置のような部屋に閉じ込められ、そこから道頼に救出されるまでのことである。初めて姫君と会った道頼は、姫君を本当に可愛らしいと思い、一方の姫君は、結婚初日を機に道頼からの問いかけに返事をするようになる。さらに結婚三日目の夜、激しい雨の中を道頼が姫君のもとにやってきたことが、二人の絆を強くすることとなった。しかし、II の期間中に道頼は姫君を救出する決意をするものの、一緒に暮らすまでには至っていない。よって、二人の心は近づいているが、身体は離れている状態である。

III は、姫君が道頼によって救出された以降のことである。この段階では、二人は完全に相思相愛であるし、救出されたことによって二人は一緒に暮らすこととなった。よって、心身ともに近づいている状態である。

これらの区分に二つの短連歌を当てはめてみたい。まず①の短連

歌は、II の時期に当てはまる。先述したとおり、①は結婚三日目の夜に詠まれたものである。結婚三日目の夜は、二人の心が強固に結びついた最初と位置づけてよいだろう。なぜなら、道頼にとっては大雨などの災難を乗り越えて、姫君のもとに到着したという達成感のようなものがあつただろうし、また姫君としては、大雨の中を道頼が来てくれたという、嬉しさがあるからだ。『枕草子』「成信の中將は」の段に

雨いみじう降るをりに來たる人なむ、あはれなる。日ごろおほ
つかなく、つらき事ありとも、さて濡れて來たらむは、憂き事
もみな忘れぬべし

という記述があるように、大雨の中を男性がやって来るということ
は、当時の女性にとって大変嬉しいことであつた。さらに、この場
面は徐々に関係が深まってきた二人に訪れた、初めての危機である。
この危機を回避したという面から見ても、二人の心が強固に結びつ
いた最初と位置づけてよいのではないか。そのような状況で詠まれ
たのが①なのである。

続いて②の短連歌であるが、これはIIIの時期のものである。区分
表の傍線箇所を見ると分かるように、姫君と道頼の、対面や手紙に
よる和歌贈答は、姫君救出後の②より前の場面でも見られる。しか
し、二人が対面し、かつその場で歌を詠み合うのは、救出後では②
が初めてなのである。

では、なぜ傍線箇所ではなく、②の場面で、対面して歌が詠み交
わされたのだろうか。また、なぜその歌は短連歌だったのだろうか。

実は姫君救出直後の時点において、姫君と道頼がこれから一緒に暮らしていく予定の二条殿には、生活していくために必要な侍女や調度品が、十分にそろっていないかった。姫君救出が、急遽行われたことだからである。侍女や調度品をととのえるため、しばらくのあいだ二条殿は慌ただしい状態であった。②が詠まれた場面は、このような慌ただしさが一段落し、ようやく二人が落ち着いた結婚生活を始めた時点なのだ。この時点では、暖かい二条殿にはすべての調度品が揃っており、そこには道頼がいるという環境になっている。寒い中納言邸の、しかも「樞戸の、廂二間ある部屋の、酢・酒・魚など、まさなくしたる部屋の、ただ畳一枚、口のもとにうち敷きで」(巻一、一一一頁) あるいはそのような部屋で、典薬助と逢わされそうになっていた救出前の環境と、見事に対照的である。

先ほど、結婚三日目の夜は二人に訪れた「初めての危機」だと述べたが、姫君が物置のような部屋に閉じ込められ、典薬助と逢わされそうになり、「死」ということが何度も姫君の脳裏をかすめるというのは、二人に訪れた「最大の危機」である。①と②は、これらの危機を乗り越え、安堵感が二人を包んでいるときに交わされた歌なのである。

これらのことから、『落窪物語』における短連歌は、姫君と道頼の心身の距離が近づいていく過程において、もつとも距離が近づいたポイントで詠まれていると考えられるのである。姫君と道頼の心の結びつきは、初めから強固だったわけではない。道頼が姫君に対して誠実な態度をとり続けたことで、次第に強固になっていったの

である。心の結びつきを強固にすることが、いわば「完成した」ポイントが①の詠まれた場面であり、心だけではなく、同じ屋根の下で暮らすという意味での身体の結びつきも「完成した」といえるポイントが、②の詠まれた場面なのである。

逆に言えば、二人の心身の強固な結びつきを表すものとして、短連歌が用いられているのではないだろうか。短連歌は二人で一つの短歌を合作するものなので、その二人の連帯を強調するという役割を担うことができるのである。このように考えれば、二つの短連歌とともに、姫君と道頼の対面場面で詠まれているということも、理解できるだろう。また第三節で、『落窪物語』の短連歌の共通点として、短連歌のあとに「臥し給ひぬ」という記述があることを指摘した。短連歌が二人の心身の強固な結びつきを表すからこそ、そのあとに「臥し給ひぬ」という記述が導かれるのである。

その役割を担った①と②の短連歌を比べると、②のほうがより連帯感が感じられる。①は前句が問いかけになっている分、前句と付句の間に独立性が見られることと、②は付句を前句の「思ふとも」に統括しているので、前句と付句につながりがあることが理由である。この前句と付句のつながりについて、もう少し考察してみよう。

注目したいのは前句末尾の「思ふ」と、付句冒頭の「言はで」である。

まずは、「言はで思ふ」という表現について見てみたい。『古今六帖』の第五帖には、「言はで思ふ」の題が立てられており、次に挙げる歌を含む六首の歌が収められている。

心には下ゆく水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる

〔古今六帖〕

つまり「言はで思ふ」という表現は、和歌ではよく用いられるものなのである。よって、和歌表現の上で「思ふ」と「言はで」の二つの言葉には、つながりがあるといえるのだ。なお、第四節で触れた「人知れず……」歌にも、「思ふ」と「言はで」が用いられている。

続いて、その「人知れず……」歌と、②の姫君の前句を比較してみよう。

人知れず思ふ心も言はでさは露とはかなく消えぬべきかな
はかなくて消えなましかば思ふとも

このように、「はかなく」「消え」「思ふ」という語句が重なっている。またこの二首は、既述のとおり、筆以外のものを用いて書き付けられた点でも共通している。

第四節で述べたとおり、②の場面で姫君は道頼に、短歌もしくは短連歌を詠みかけようとした。「はかなくて消えなましかば思ふとも」は、短歌の上句もしくは短連歌の前句だったことになるが、では姫君はどのような下句を続けようとしていたのか、あるいはどのような付句を詠んでほしかったのだろうか。下句であれば、「甲斐のないことでしょう」といった内容を詠もうとしていた可能性はある。しかし、「言はで思ふ」という常套歌句や「人知れず……」歌との深い関わりを考慮すると、姫君は「思ふとも」のあとに「言はで」と続け、「あなたを思っていると言わずにむなしく終わって

たでしょうね」という内容を詠もうとしていた可能性のほうが、高いかもしれない。また付句に関しても、「言はで」を用いて詠んでほしいという思いがあったのではないか。その姫君の思いに呼応するように、道頼もまた姫君の前句を見たときに、自然と「言はで思ふ」や「人知れず……」の和歌を思い出し、「言はで」という言葉を連想したのではないだろうか。

以上の考察により、姫君が歌で言い表したかったこと、そして道頼が詠んだ付句は、どちらも「もしも姫君が幽閉されていた時にそのままはかなく死んでしまっていたならば、あなた（道頼の場合には姫君、姫君の場合には道頼）を思っているとも言わずにむなしく終わっていたでしょうね」というように、同じような内容であることが分かる。二人のこの共通の思いが、前句末尾の「思ふとも」、そして付句冒頭の「言はで」で、びたりと重なるのである。さらにこの短連歌の贈答は、男からの懸想に女が反発するという、短歌による贈答の一般的な型とは大きく異なっており、仲睦まじい様子が前面に押し出されているやりとりになっている。これらのことから、二人の連帯感を感じるのである。

①と②の連帯感の差は、そのまま姫君と道頼の心身の距離を表しているのだろう。①が詠まれた当時は、近いのは心の距離だけだったが、②では心も身体も、どちらの距離も近づいているのである。

第二節で、主に付句を詠む者の機知を試す、言語遊戯的な側面が短連歌の特質であると述べた。もちろん『落窪物語』においても、その特質は認められる。しかし『落窪物語』ではその特質よりも、

詠み人同士の連帯の強調という役割のほうが、重要なのだと思う。姫君と道頼の心と身体との距離が、徐々に近づいていく過程を表すために、短連歌は欠かせないものなのである。

注1 土橋寛「連歌様式の發生とその本質―短連歌について―」（『国語国文』一九三七年四月）一八頁。

2 木藤才蔵「短連歌の形成と展開」（『日本女子大学文学部紀要』一九七〇年三月）四頁。

3 注2論文、五頁―六頁。

4 注2論文、六頁。

5 『日本古典文学大系 落窪物語 堤中納言物語』（松尾聰校注、岩波書店、一九五七年八月）二七八頁。

6 鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会、一九九〇年十月）六四―六五、四二二―四二三、八二八頁。

※ 『落窪物語』の引用は、『新版 落窪物語 上 現代語訳付き』（室城秀之訳注、角川文庫、二〇〇四年）に拠り、その頁数を記した。他作品の本文引用は、『大和物語』は『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（小学館、一九九四年）、『伊勢物語』は『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（小学館、一九九四年）、『和泉式部日記』は『新編日本古典文学全集 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館、一九九四年）、『枕草子』は『新編日本古典文学全集 枕草子』（小学館、一九九七年）、『古今和歌六帖』は『校註国歌大系 第九卷』（講談社、一九七六年）に拠る。

（しかのや・ゆうき 大学院博士前期課程在学）